

工藤光一さんを悼んで

鈴木 茂

昨年12月の初め頃だったと思う。大学院後期課程入試の口述試験の担当者を調整していて工藤さんのご都合をお聞きしなくてはならなくなり、いつもとおりメールを差し上げた。翌々日に送られてきたのは奥様からのメールで、現在入院中で対応できる状態になく、大学の方で善処してほしい、と書かれていた。夏休みが明けて2学期が始まってからも、ときどき廊下ですれ違っただけは挨拶をし、会議でもお姿を拝見していたので、まったく意外であった。それでも、数年前から病気がちであることは気にかかっていたが、何度目かのご入院で、年が明ければまた職場に戻られるものと思っていた。しかし、その望みも叶わず、再びお会いすることができないまま旅立たれてしまった。痛恨の極みである。歴史家として脂が乗ってくるこれからというときに、ご本人もご家族もさぞや無念なことであろう。

工藤さんは私より2歳年下でともに外語大の出身で歴史学を専門としてきたが、学科（フランス語とポルトガル語）が違い、大学院の進学先も専門地域もちがうので、学部・大学院時代には面識はなかった。おそらく私がある学会の運営委員をしていた80年代半ばであろう、同僚にフランス史の方がおられ、外語出身でフランス近世史の秀才がいると聞いた覚えがある。それが工藤光一さんの存在を知った最初だったかと思う。その2、3年後、『社会史研究』の最終刊（第8号、1988年3月）に工藤さんの論考を見つけ、若いのにすごい人があるものだ、と思いながら読んだ記憶がある。研究ノートという扱いであったが、「移行期における民衆の「ソシアビリテ」と題されたその論考は、革命前夜のフランス南部の農村における社会的結合について文書館史料を駆使して分析した40頁ほどもある大論文であった。『社会史研究』は、阿部謹也、川田順造、二宮宏之という3人の碩学が同人を務めていた雑誌である。おりしもいわゆる社会史ブームたけなわの時代で、アカデミズムの内外で大きな注目を浴びていた。その少し前に、私は別の雑誌の社会史特集の編集を手伝ったことがあった。その特集に所収されていた論考には社

会史批判の傾向があり、私自身もブームとしての社会史には懐疑的な気持ちがあった。しかし、工藤さんの論考は精緻な実証研究で、ブームにあやかろうなどという雰囲気は微塵も感じさせなかった。そして、しばらく後、恩師であられた二宮宏之さんの後任として母校に赴任され、はじめて面識をえたのである。

工藤さんは亡くなるまで、寡作であったかもしれないが、「＜国民祭典＞と農村世界の政治文化」『思想』836号（1994年）など、珠玉という表現がふさわしい作品を世に出された。亡くなってしまった今読み返してみると、学問的な緻密さもさることながら、誠実な人柄が滲み出ていて、涙が止まらない。本当に惜しい人をなくしたものだ。

ご冥福をお祈りするとともに、奥様、ご家族の皆さんにお悔やみを申し上げます。（2015.2.1）

（すずき しげる・東京外国語大学大学院総合国際学研究院）